

hgu_LAB. MAGAZINE

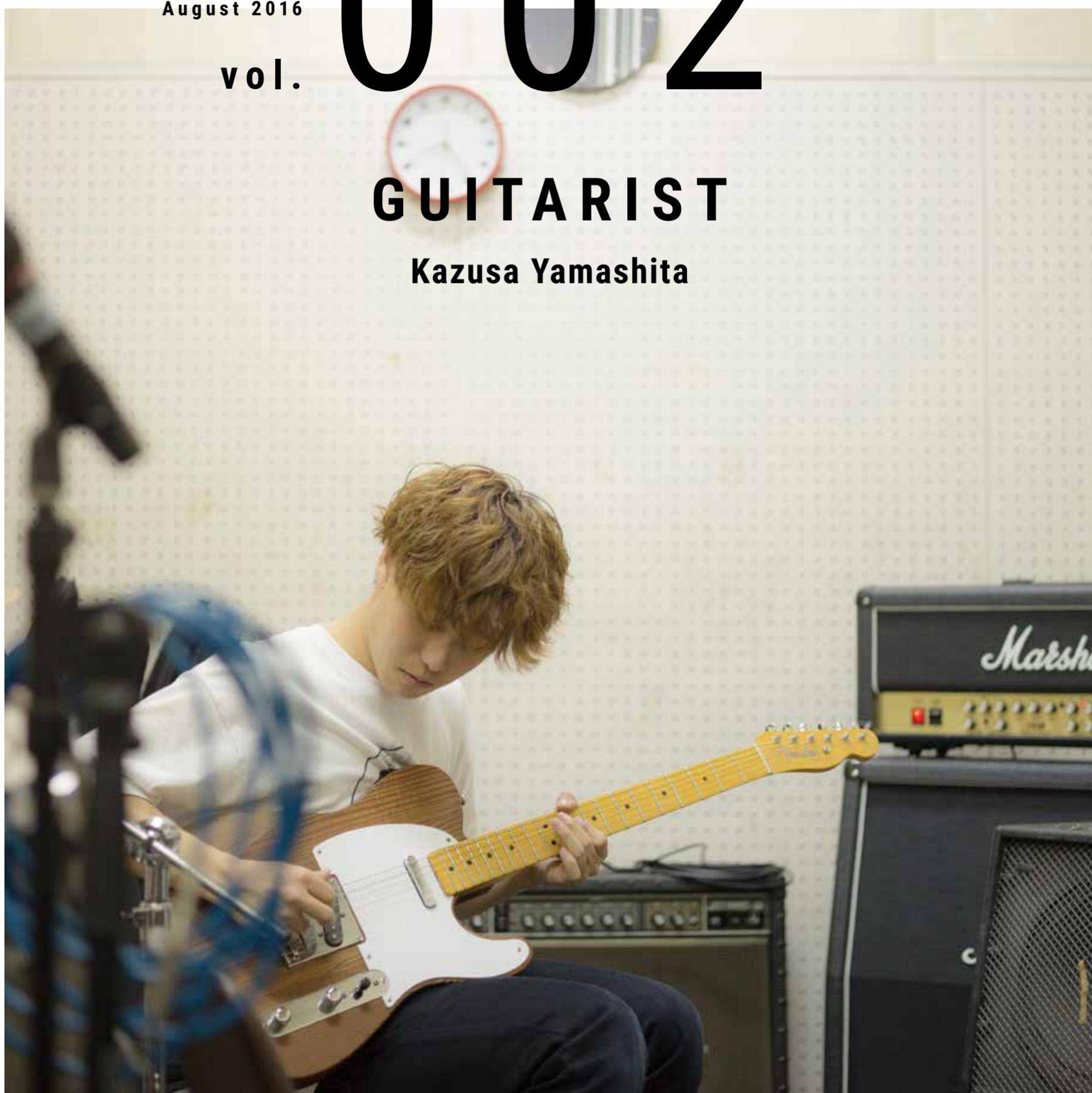
August 2016

vol.

002

GUITARIST

Kazusa Yamashita



HOKKAI-GAKUEN UNIVERSITY

**It's the music.
That's it,
just music.
Simple.**

Paul McCartney

from the film "Nowhere Boy" (2009)

Kazusa Yamashita

山下 加朱沙

北海学園大学 法学部 1部

政治学科 2年

北海道北広島高等学校出身

全国展開する総合楽器店「島村楽器」が、新しい才能を発掘するために主催しているコンテスト「HOTLINE」に、高校3年生のときにバンドで出場。北海道エリアのベストギタリストに輝いた。大学ではフォークソング研究会とジャズ研究会に所属し、さまざまな活動を通して自分ならではの音楽を追求している。

好きな音楽を、一生続けていく。 それだけは決まっています。

キュワア、ギャウウオオ、ジャカジャカ、ヴオオオン…

メロディの起伏を乗り越え、コードの分かれ道を選びながら、最後の1音へ。
その道のり、すべての瞬間にグッとくる。それが、音楽の醍醐味といえるでしょう。
ビートやリズムという時のなかで、自分を表現してきたギタリスト、山下加朱沙さん。
人生という時のなかでは、どんな自分を表現していくのでしょうか——
ジャーン (The Beatles “A Hard Day's Night”)

きっかけは、ギター女子

——音楽にはいつごろから興味を抱いたんですか？

父親がビートルズの大ファンで、車の中などでよくかけていたんですね。だから物心ついたころには自分もビートルズにハマっていた感じですね。

——それで自分でも演奏してみたくなってギターを？

というよりは、小学6年生のときに、当時好きだった女の子がギターを弾いていたんです。それで単純に「自分もギターを始めたら、もっと仲良くなれるんじゃないか？」という理由で始めました(笑)。最初は父親のお下がりのアコースティックギターを触りはじめて、それからすぐに、誕生日とクリスマスとお正月の分を合わせてエレキギターを買ってもらいました。

——理想的なきっかけですね(笑)

はい、ものすごく練習のモチベーションになりました。その子から「それ弾けるようになったんだ！」って言われて、「よっしゃ」みたいな。基本的には独学で、たまに近所のお兄ちゃんに教えてもらったりもしていましたね。ちなみに、結局その子とはつきあえなかったんですけど(笑)

——最初はやはりビートルズのコピーから？

そう言ったほうがいい流れなんですけど、最初に練習したのは嵐でした(笑)。当時「風の向こうへ」という曲が流行っていて。あとはYUIとかもやりましたね。初めて人前で演奏したのは、「6年生を送る会」という

小学校の行事でした。とくにアピールポイントのなかったぼくでも、ギターを弾いているとみんながこっちを見てくれて、「いいね」「すごいね」って言ってくれる。自分の存在を認められるのがうれしくて、これまで続けてきたところもあると思いますね。

部室棟の地下にある 最高の練習環境

——中学校からはどんな感じ？

中学校では、2人組のアコースティックギターユニットを組んでいて、高校からはバンドをやっています。高校3年生のとき、全国展開する楽器店主催のバンドコンテストに参加しました。スクール部門で北海道エリアの1位になり、一般部門のバンドに混ざってエリアファイナルに出場。そこでベストギタリストに選ばれました。

——当然でしょ、という感じ？

いえいえ、まさか選ばれるとは思ってなかったので、会場の中でスマホをいじってたんですね。そうしたら周りがうわーっと騒ぎ出したので、「どうしたの？え、おれ!？」という感じでびっくりしました。めちゃめちゃうれしかったですね。両親もすごく喜んでくれて、父親は泣いてました。

——受賞後、心境や環境の変化はありましたか？

やっぱり自分に自信がもてるようになりましたね。そ

れと、企画ライブなどのオファーも舞い込むようになりました。音楽の世界の知り合いが増えて、視野がすごく広がったと思います。

——そうして大学に入学し、現在は大学のフォークソング研究会に入っているそうですが、フォークソングの研究をしているわけではないですよね？

してないですね(笑)。もともとはフォークソングをやる人たちの集まりだったと思いますが、今はJロックから海外のマニアックな感じまで、幅広い音楽性の人たちが100人ぐらい集まっています。あと、ぼくはジャズ研究会にも入っていますし、高校時代から続いているミクスチャーロック系のバンドなど、いろんなかたちで、いろんな人たちと音楽をやっている感じですね。

——練習は学内でもするんですね？

はい、部室棟の地下に音楽練習室が9部屋もあって、音楽系の各サークルに割り当てられています。最初にこの環境を見たときはめっちゃ感動しましたね。「おお、やべえ」みたいな(笑)。さらに個人練習室が6部屋あるので、授業のない時間にはそちらに入って、曲をつくったりしていますね。それで授業の時間になったら、「よし、教室に行こう」という感じで。

——つまり、きちんと学校に来ていると。

しっかり通学してますよ(笑)。2講目からの日が多いので、恵庭市内の自宅を9時過ぎに出ます。放課後は学外のスタジオで練習をすることもあります。そのひとつが地元にあるんですよ(下段参照)。それと、週3日ほどはアルバイトもしていますね。

地元のスタジオ兼相談部屋

——おふたりの出会いはいつごろ？

山下 ぼくは高校2年生のころから JUNCTION を使わせてもらっています。練習とかレコーディングとか。地元こんないいスタジオができて、本当にうれしいです。

西川 東京の楽器屋で働いてから地元に戻り、自宅兼スタジオを建てたら、最初に来てくれた高校生が山下くんたちですね。高校生ということでレベルは全然期待してなかったけど、めちゃくちゃうまくて衝撃的だったよ。

山下 おー、うれしいですね。

西川 しかも年齢は全然違うのに、聴いている音楽は近くてね。誰よりも近いかもしれない。

山下 めちゃ話しましたよね。ジョー・ロビンソンとかも西川さんから教えてもらったんですね。音楽から恋愛

まで、いろいろと相談をさせてもらって(笑)

西川 まあでも、今の10代はしっかりしているよ。突っ走るようなことはしないよね。山下くんも、ベストギタリスト賞をとったり、それなりの実績もあるのに、「音楽で食っていくぜ!」とは言わないでしょ。それは賢明だと思う一方、失敗を繰り返してこそ、岐路に立ったときに向かうべき道が感覚的にわかる気もするんだよ。

山下 んー、やりたくない音楽をやってまで、音楽で食べていこうとは思えないんですね…。

西川 気持ちはよくわかるよ。いずれにしても、きちんと道を選べるといいね。最近おれはカントリーだよ。今度牧場で演るんだ。牧場でカントリー、最高でしょ？

山下 最高ですね(笑)。テンガロンハットを被って。

西川 意味知ってる？ 10ガロンの水が入る帽子。

山下 へえ〜。ぼくも今日はずっと水を飲んでるんですよ。シャカリキ(P6参照)を食べたからかな(笑)

Taihei
Nishikawa

西川 泰平さん

音楽スタジオ
JUNCTION オーナー

My Mentor





GUITARIST | KAZUSA YAMASHITA
HOKKAI-GAKUEN UNIVERSITY

音楽で食べる・食べない問題

——法学部ということですが、興味深い授業は？

刑法、民法、倫理学など、どれも興味深いですが、2年生から始まった樽見弘紀先生（下段参照）のゼミが特におもしろいです。今は読んだ本の内容を議論しながらゼミ形式の基本を身につけているところですが、これから美術館や劇場といった芸術施設の経営などについて調べていく予定です。たとえばオーケストラの団員も、大きな括りでは自分と同じミュージシャンですよ。そういう人たちの活動費用がどのように発生するかなど、文化活動とお金の関係については自分の音楽活動ともつながるところがありそうで、とても興味があります。

——たしかにバンド活動というのは機材にライブ、レコーディングなどさまざまな費用がかかりますよね。そうですね。たとえばCDを作るとなれば、ちゃんと黒字になるように逆算して制作に臨みたいんです。それで実際に黒字になれば、その後の活動のモチベーションにもつながると思うので。音楽を楽しんでいくための手段として、お金のことはきちんとやっていきたいですね。



——ところで、なぜ法学部を選んだんですか？

公務員として働きながら、好きな音楽を続けていくというのは、将来のひとつのかたちかなと思ったからです。音楽の先輩たちも、そういう人は少なくないんですよ。学園大の法学部は、道内の私大で多くの公務員を輩出しているというのはポイントでした。

——もしも公務員になったとして、どんな仕事したいというイメージをもっていますか？

正直なところ、まだ具体的なイメージはありませんが、音楽で地域を活性化するとか、そういうことに関わりたいですね。公務員ではないとしても、なにかしら音楽に関わる仕事に就きたい思いはあります。

——プレーヤーとして食べていくという考えはない？

もちろん願望としてはあります。でも現実的に考えれば、簡単な話ではないのもわかっています。であるならば、今は音楽も大学の学びも全力でやるしかないと思っています。どっちも中途半端になってしまうのがいちばん怖い。進んでいくなかで本当の岐路に立ったとき、そこで考えればいいというか、まだ迷うような段階ではないのかな。10年後の自分は、この記事をどんな立場で読んでいるんでしょうね。高校のころは「就職？なに言ってんの？」みたいな感じで笑ってましたけど（笑）

ポール、かっけー！

——社会に対するカウンターとしての音楽やバンド活動というスタンスではないんですね。

自分の場合はそうではないですね。サッカー部の人がサッカーに打ち込むように、純粋に音楽を楽しみたいというだけで。ビートルズが結成されたばかりのころ、ポール・マッカートニーがジョン・レノンに言った言葉がい

いんですよ。「ノーウェア・ボーイ」という当時の彼らの様子を描写した映画に出てくるんですけど、「これは音楽だ、純粋に音楽をやるだけさ (It's the music. That's it, just music. Simple.)」っていう。ジョンが抱いていたロック=反社会的というイメージを真っ向から否定する感じが「かっけー！」みたいな（笑）

——まさに自分の思いがそのフレーズに込められていたんですね。

そうですね。とにかく好きな音楽をずっと続けていきたい。音楽を好きであり続けたいです。好きな音楽をやって、それが広く受け入れられて売れるのも楽しいだろうし、ギターで食べていけるなら、フルタイムで演奏ができるので、それはいいと思います。でも一方で、売れる音楽をつくるとなると、それなりに合わせなきゃいけない部分も出てくると想像します。自分が本当に好きだと思える音楽だけをやって、それに対して需要があるなら最高でしょうけど、それは簡単ではないですよ。

——やりたい音楽性と市場がマッチしていない？

ロックとヒップホップを融合させたようなミクスチャーがすごい好きで、そこにジャズの要素だったり、テクニカルなギターが絡んでくるような音楽を追求していきたいんですけど、少なくとも札幌のバンドではあまりいないタイプの音楽かもしれません。まあ、考えすぎかもしれないですけど。

——「札幌のバンド」というワードが出てきましたが、札幌の音楽シーンは、やはり大学生が多いんですか？

そうですね。学生やフリーターを問わず、10代後半から20代前半の人数が多いと思います。学生の場合は、就職をして辞めてしまう人と、その後も続けている人に分かれる感じでしょうか。

ギタリスト、芸術文化政策を学ぶ

——まず、先生の専門ゼミの概要を教えてください。

樽見 法学部には法律学科と政治学科があって、私は政治学科の教員なんです。それでこのゼミでは、政治学の領域のうち、芸術文化政策について学びを深めることをテーマとしています。今は劇作家・平田オリザの『芸術立国論』という本を読んでいて、これから実際のフィールドにも出ていくことになります。

山下 本の内容をもとに、芸術とは水や空気のように、人の生死に関わるのか、という議論を昨日しましたね。

樽見 そうそう。それで山下くんが、アートがない人生は白黒の風景みたいで、アートがあってこそ人生が彩られるってね。それは言い得て妙だなと思ったよ。

山下 ホントですか。ありがとうございます。

樽見 それと、これからみんなで読もうと思っている1冊が、故ピーター・ドラッカーの本。マネジメントの父と称される経営学者で、彼はオーケストラはあらゆる組織の未来像だと言ったんだ。世の中の組織はピラミッド型のトップダウン式が多いけれど、オーケストラはそうではなくてフラットな関係の専門家集団だよ。未来の組織は、オーケストラのようにもっと有機的でフラットになっていくだろう。ところで山下くんも音楽をやっているから、このゼミに興味を抱いてくれたのかな？

山下 はい。芸術に関わるお金の回り方について、昔から気になっていました。

樽見 つまり芸術を生業として考えた場合に、どうすれば成立させられるかということだよ。今はインターネットがあったり、クラウドファンディング（ネット上で不特

定多数の賛同者から資金を募るしくみ）みたいなやり方があったりして、昔よりも多様に芸術家として生きられるようになったと思う。100%芸術家、50%芸術家、いろんなスタイルが可能になってきたんじゃないかな。プロとアマの境界線がなくなりつつあるとも言える。留学生だった頃、ニューヨークのセントラルパークで、「おれは芸術家だ！」と言いながら、とぼけたおじさんが歩いていたのを思い出したよ。

山下 稼いでいなくても、めっちゃカッコいい音楽をやっている人が、自分の周りにもいます。

樽見 音楽って、本質的には人の心を揺り動かすもの。プロじゃなくても、そういう作品はつくれるよね。

——先生が山下くんに期待することは？

樽見 個性を発揮して、ゼミをかき回してほしいな。あまり収まりきらないで、はみ出してほしいです。

山下 はい。フィールドワークも楽しみです。

樽見 去年の二部の学生はバンコクの総合文化施設に行ったんだよ。

山下 すごい！ぼくはウィーンとか行きたいです（笑）

樽見 ところで、高そうなギターを持っているよね。実はぼくも3年前にチェロを買ったんだよ。

山下 チェロですか。カッコいいですね。

樽見 でも、今は眠っているんだ。買ったばかりのころはヤル気あったんだけどね。三日坊主ではなく「練習三回坊主」です。いづれまた！

山下 今度、ぜひ聴かせてください！

Hironori Tarumi

樽見 弘紀
法学部
政治学科
教授

My Favorite Teacher

My Favorite Shop



らー麺シャカリキ

札幌市豊平区平岸 2 条 3 丁目 2-22
facebook.com/shakariki423
twitter.com/hkstnk

正油 740円
味噌 (エビ風味) ... 790円

※2016年6月現在

ソウルを感じるおいしさです。 今日はヤサイマシマシで！

ラーメンが大好きなんです。なかでもシャカリキさんですね。盛りもいい感じなんです、豚骨ベースのスープとモチモチの太麺の相性が抜群で、とにかくおいしいんです。シャキシャキのヤサイ、厚切りの豚も最高ですね。大学から歩いてすぐなので、足繁く通っています。正油と味噌、期間限定メニューなどをローテーションで(笑)。バンド練習の後に来たりすることが多いです。夏休みや冬休みになると来られなくなるじゃないですか。そうすると禁断症状が出ます。「あー、食べてー！」と。ソウルフードです。最初は高校3年生のとき、この辺りに住んでいる友だちがいて、一緒に食べに来たんですよ。それで感動して、シャカリキさんが近いから学園大を選んだというぐらいの(笑)。今日は味噌です。トッピングはヤサイマシマシ、ニンニクマシ、カラメマシです。マシマシでも料金は変わらないですから、大学生の財布にはやさしいですね。店長さんもやさしいですよ。んー、おいしかった！燃え尽きました！ごちそうさまでした！

My Favorite Things



Old Growth Redwood
Telecaster

Fender

生涯3本目のギター。テレキャスはじゃじゃ馬な感じで、扱いの難しさが逆に愛くるしいですね。ボディの木目が激シブです。ずっと欲しいと思っていたモデルなのですが、ネット上にもなくて諦めかけていたところ、札幌の楽器屋さんで最後の1本というのを発見。親にお金を借りて買いました。今も返済中です(笑)。ギターに追いつけるようにがんばりたいですね。このハードケースもカッコよくないですか？



BECK

ハロルド作石

あるミクスチャーロックバンドの成長を描いた漫画です。アイドル的じゃなく、地道にがんばっていく感じのストーリーで、ちょっと疲れたときとか、ライブでミスった後に読むと効果があります(笑)。すごく好きで、これまで全34巻を通して5回は読み返していますね。



エフェクター

Wampler Pedals

Euphoriaというオーバードライブ(歪み系)エフェクターです。クリーンに近い歪みが好きですね。名ギタリストのセッティングはすごく気になります。ライブ映像を見て、一時停止をさせながら、これか!と。それを自分で再現したりするのが、めっちゃ楽しいです(笑)



エフェクターボード

ARMOR

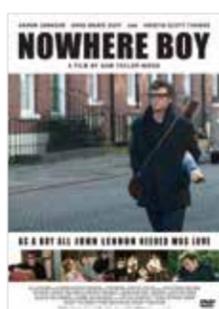
高校3年生のとき、ベーシストのKenKen(金子賢輔)のライブが千歳であり、ほくも誘ってもらって出演したんです。それでこのボードにサインをもらっちゃって。バンドコンテストのバックステージパスとかも貼って、いろんな思い出とともにエフェクターを持ち歩いています。



赤いキャップ

4プラ自由市場

トム・モレロ(レイジ・アゲインスト・ザ・マシーン)の赤い帽子が、ほどよくダサイんですね(笑)。4プラの自由市場で、フレンドリーなおばちゃんから「被ってみな」と言われたのが、まさに!という感じで。モレロリスペクトです。これを被ってライブに出ています。



ノーウェアボーイ
ひとりぼっちのあいつ

Sam Taylor-Wood

若き日のジョン・レノンを描いた映画です。...ではあるんですが、ぼくとしてはポール・マッカートニーの「純粋に音楽をやるだけさ」という言葉にやられました(詳しくはP5参照)。ギターや機材もすごく凝ったものが出てきたりして、音楽的にもとても楽しめる映画です。

DVD発売中 / 3,800円(税抜) / 販売元:ハビネット
©2009 Lennon Films Limited Channel Four Television Corporation and UK Film Council. All Rights Reserved



シリコンケース(ミント)

Apple

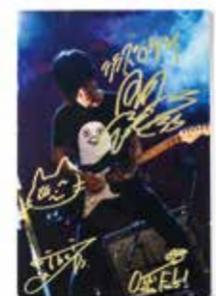
シンプルかつ滑らないケースを探していたら、純正品にたどり着きました。ガチャピンカラーが気に入ってます(笑)。スマホでは学園大のG-PLUS!(時間割や休講情報などが一元化された学生総合支援システム)をよく見ます。スケジュールアプリやLINEも使う頻度が高いですね。



ショルダーバッグ

STUSSY

彼女からの誕生日プレゼントです。絶対に入れているものは、ギターピックとスマホの充電器。持ち物を減らしたいタイプなので、この小ぶりのバッグはちょうどいいサイズで気に入っています。ぼくが選んだわけじゃないですが、あまり主張しない感じの色もいいですね。



カラスは真っ白の
サイン入りプレート

札幌で結成し、今は全国区で活躍している「カラスは真っ白」というバンドが好きなんです。とくにギターのシミズコウヘイさん。ぼくのギターヒーローです。このプレートは、あるイベントに参加し、じゃんけんで勝ってもらったもの。音楽をつくるPCのそばに飾っています。